

國學院大學學術情報リポジトリ

Oborozukiyo's Exit Letter in the Tale of Genji: From Wakana Volume 2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小菅, あすか メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001528

『源氏物語』 朧月夜の退場と手紙

―「若菜下」巻「御文のとぢめ」を端緒として―

小菅 あすか

論文要旨

『源氏物語』「若菜下」巻、朧月夜は光源氏へ手紙を送り、物語を退場する。この手紙には濃き青鈍の紙と櫛の折枝が用いら

こでの朧月夜の手紙が何を意味するのか、内容自体も未だに解釈が定まっていない。

れ、文面には「あま舟に……」という和歌が記されていた。従来、「若菜上」巻における朧月夜の再登場の意義は、第二部の主題性や女三の宮降嫁による複雑な人間関係のなかで捉えられてきた。光源氏と朧月夜との恋の再燃は、往時の恋に逃避する彼の姿を映し出し、そうした好色性が女三の宮降嫁を導いたと指摘される。一方、「若菜下」巻においても、朧月夜の退場が光源氏に何をもたらすかが議論されている。しかしながら、こ

本論では、朧月夜がこの手紙を「御文のとぢめ」と位置づけることを端緒に、料紙や折枝、和歌表現について分析すること、この手紙に表出する彼女の姿が二人の物語の終焉にいかなる意味を持つのかを明らかにする。

【キーワード】「光源氏と朧月夜」「手紙」「とぢめ」「濃き青鈍の紙と櫛の折枝」「あま舟」

はじめに

「若菜下」巻では、紫の上の発病、女三の宮の密通といった六条院世界に暗い影を落とす出来事が次々と描き出され、それらは晩年の光源氏にどう生きるか、問いを投げかけることになる。そうした過酷な状況に苦慮する光源氏のもとに、朧月夜が出家を遂げたとの

報が届いたのであった。

つひに御本意のことしたまひてけりと聞きたまひては、いとあはれに口惜しく御心動きて、まづとぶらひきこえたまふ。今なむ、とだににははしたまはざりけるつらさを浅からず聞こえたまふ。

「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩たれしも誰ならなくに

さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて、今まで後れきこえぬる口惜しさを、思し棄てつとも、避りがたき御回向の中にはまづこそはとあはれになむ」など、多く聞こえたまへり。とく思し立ちにしことなれど、この御妨げにかかづらひて、人にはしかあらはしたまはぬことなれど、心の中あはれに、昔よりつらき御契りをさすがに浅くしも思し知られぬなど、方々に思し出でらる。御返り、今はかくしも通ふまじき御文のとちめと思せば、あはれにて、心とどめて書きたまふ。墨つきなどいとをかし。「常なき世とは身ひとつにのみ知りはべりにしを、後れぬとのたまはせたるになむ、げに、

あま舟にいかがは思ひおくれけむ明石の浦にいさりせし君

回向には、あまねきかどにても、いかがは」とあり。濃き青鈍の紙にて、櫛にさしたまへる、例のことなれど、いたく過ぐしたる筆づかひ、なほ古りがたくをかしげなり。

〔若菜下〕四―二六一―二六三頁¹

光源氏は、あまりにも急な報に「いとあはれに口惜しく」思い、朧月夜へ手紙をしたためる。ここでは、何も告げずに出家したことを恨み、過去の須磨流離を引き合いに出しながら、改めて二人の因縁の深さを突きつけている。一方、手紙を目にした朧月夜も「心の中あはれに」と、光源氏と同様の心情を抱き、改めて二人の「御契り」の深さを反芻する。これが光源氏との「御文のとちめ」になるであろうという彼女の予想どおり、この手紙の往還をもって、二人の関係は終焉を迎え、朧月夜は物語を退場していくことになるのであった。

従来、「若菜上」巻における朧月夜をめぐるのは、光源氏との交渉を絶つてからおよそ十年の沈黙を経て、なぜ再び登場するのかという点に注目されてきた。森一郎氏は、女三の宮降嫁を導いた光源氏の色好みは「朧月夜尚侍との再会という変奏曲をも加えながらいよいよ豊かであった」と述べる。また、石津はるみ氏は、私情を拒否して出家を果たした朱雀帝と、往時の恋に逃避する光源氏という「両者の対照的な姿を描き出す恰好の媒介者」として、朧月夜を位置づけている。さらに、鈴木日出男氏は、光源氏と朧月夜の再会は「源

氏が憂愁の紫の上に心隔てられ、また女三の宮の幼稚さに落胆するところから、おのずと往年の恋へ進み出ていくという経緯による⁴とし、「女三の宮降嫁直後の物語は、源氏と紫の上、源氏と女三の宮、源氏と朧月夜の君の關係が、あたかもそれぞれを力学的に計量しあっているかのように相対化されている」と指摘している。このように、「若菜上」巻における朧月夜は、女三の宮降嫁によつてもたらされた複雑な人間關係のなかで捉えられ、光源氏の色好みを支えるものとして、彼を取り巻く過酷な現実から逃れるための慰安の場として機能していたといえよう。では、「若菜下」巻において、朧月夜が出家を果たし、物語から退場していくことはどのように捉えたらよいのであろうか。

従来、先に掲げた朧月夜の手紙の内容については、秋賢淑氏が、「心の寄り所を求めるあわれな四十過ぎの光源氏に、きびしいぐらゐの皮肉を残して永遠に別れを告げた」ものと解している。だが、その一方で姥澤隆司氏は、「二人の遣り取りは長い物語の展開の中で互いの信頼關係の中で築き合つて来た絆の深さを改めて示すものであった」と述べている。このように、ここでの朧月夜の手紙の内容をめぐつて、解釈に違いが生じていることがわかる。「若菜下」巻における朧月夜の退場が、二人の物語のなかでどのような意義を持つのかを明らかにするためには、まずは彼女の手紙の内容を改めて考察する必要があるのではないか。

本論では、「若菜下」巻における朧月夜の手紙について、手紙の形式や、文面に記された和歌表現を分析し、そこに表出する彼女の最後の姿がいかなるものであったのかを検討する。その上で、この朧月夜の最後の手紙が光源氏との物語のなかでどのような意味を持つのかを明らかにしたい。

一、「とぢめ」の手紙

本節では、手紙の形式や文面の分析に入る前に、「御文のとぢめ」という表現から、物語におけるこの手紙の位置づけを考えることから始めたい。

出家を果たした朧月夜は、光源氏への返事を「今はかくしも通ふまじき御文のとぢめ」と捉えている。古く『岷江入楚』は、「箋尼

すかたにて艶書めきてかきかはし給はん事は有ましき事なれはとちめといへり」と、ここに出家を果たした身で恋文を交わすことへの躊躇いの心情を読み取っている。「とちめ」とは物事の終わりの意であり、ここでの「御文のとちめ」は、光源氏と交わす最後の手紙くらいに解することができるだろう。しかし、この「とちめ」という語に注目してみると、『源氏物語』に先行する文学作品では、『枕草子』に動詞「言ひとちむ」（一九五頁）が一例確認できるのみである。それに対して『源氏物語』では、名詞「とちめ」が一八例、動詞「とちむ」が六例、「思ひとちむ」が二例、「書さとちむ」が一例と、関連語を含めると全体で二七例確認でき、以後に成立した他作品を含めても突出して多用されている。¹⁰

そこで、「とちめ」の関連語二七例を分析してみると、明石の君の死への感慨（『若菜上』四一一二頁）、紫の上の死（『若菜下』四一三三頁、二四〇頁、「幻」四一五三五頁）、一般論としての死（『柏木』四一二九〇頁）、柏木の死（『柏木』四一三二五頁、「横笛」四一三五二頁、三六二頁、「橋姫」五一一六〇頁）、藤壺の死（『幻』五三五五頁）と、死自体を意味する用例が目立つ。¹¹このうち、「横笛」巻における柏木の例（四一三六二頁）では、『河海抄』が「とちめは閉眼時分也」と注しており、これは「とちめ」という語の本質を考える上で重要な指摘といえる。実際に、『小右記』長元二（一〇二九）年九月一三日の記事にも、南院で亡くなった藤原道隆について「南院關白道隆閉目處事」とする一節が確認できる。また、類例として『うつほ物語』では千蔭の北の方が死去した場所を「眼閉ぢ給ひし所」（『忠こそ』一一五頁）、『蜻蛉日記』では作者の母が死去した寺を「眼とぢたまひしところ」（一三六―一三七頁）とする表現がある。かくして、「とちめ」という語の本義は、目を閉じる瞬間、すなわち死そのものにあり、『源氏物語』ではそうした意味での使用が顕著なのである。¹⁴

他方、当該場面における朧月夜と光源氏との類例として、男女間の別れに関する「とちめ」が確認できる。次に掲げるのは、光源氏との「とちめ」を思慮する空蟬の例である。

女も並々ならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲りにけると思ふにも、やがてつれなくてやみたまひなましかばうからまし、しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむもうたてあるべし、よきほどにて、かくて閉ぢめてんと思ふものから、ただならずながめがちなり。

〔空蟬〕一一一七―一一八頁

空蟬は、年若い光源氏との関係を思い悩み、音信が絶えている今こそ「かくて閉ぢめてん」と決意する。ここで光源氏との「とぢめ」を決意した空蟬は、のちに彼が寝所に忍び込んできた際には小袿だけを残し、身を隠すようにして求愛を拒んでいる。また、鬚黒の北の方も、夫との関係を「思ひとぢめ」ようとしている。

北の方、御心地すこし例になりて、世の中をあさましう思ひ嘆きたまふに、かくと聞こえたまへれば、「強ひて立ちとまりて、人の絶えはてんさまを見はてて思ひとぢめむも、いますこし人笑へにこそあらめ」など思し立つ。〔真木柱〕三―三七〇頁

鬚黒との不仲を耳にした父式部卿宮は、北の方を実家に引き取るべく迎えを差し向ける。その頃、平常心に戻っていた北の方は、鬚黒に見放されてから「思ひとぢめ」るのでは笑いの種になるであろうと、自ら彼のもとを離れる決意をする。このあと、北の方は子どもたちを引き連れて邸を去り、鬚黒との婚姻関係は事実上破綻することになる。このように、男女間では女性が男性への思いを断ち切る際に「とぢめ」と表現されることがわかった。¹⁵ こうした、男性との「とぢめ」を自ら選び取っていく女性の生き方は、当該場面において光源氏との関係を絶とうとする朧月夜の姿に通ずるものがあるだろう。

では、「とぢめ」に際した手紙には、どのような内容が記されるのだろうか。「とぢめ」を意識しながら記されたものとしては、女三の宮と明石入道の手紙の二例が挙げられる。まず、女三の宮と柏木の間で交わされた「とぢめ」の手紙から確認してみたい。死期を悟った柏木は、最後に女三の宮の「あはれ」〔柏木〕四―二九一頁）を求めて「いまはとて燃えむ煙もむすほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」〔柏木〕四―二九一頁）と和歌を送る。これを受け取った小侍従は、柏木の死が近いことを感じ、「まことにこれをとぢめにもこそはべれ」〔柏木〕四―二九二頁）と口にする。責め立てるように返事を促す小侍従に、女三の宮もしぶしぶに筆を取る。次に掲げるのは、この女三の宮の返事が病床の柏木によって開かれる場面である。

紙燭召して御返り見たまへば、御手もなほいとほかなげに、をかしきほどに書いたまひて、「心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推しはかり。残らむ、とあるは、

立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるる煙くらべに

後るべうやは」とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。

〔柏木〕四―二九六頁

従来、この女三の宮の和歌については、柏木の心情に寄り添うものであったか否か解釈がわかれている。新編日本古典文学全集頭注によれば、女三の宮は「煙くらべ」に自身の苦衷を込め、「柏木の理不尽な恋への抗議」を行なっているという。一方、佐竹彌生氏は、この手紙には、かつての幼い女三の宮像からは想像できないほどの強さが見て取れ、「ここに至ってはじめて、女三宮は自己の意志でもって柏木への愛の表白を行なった」と説く。このように、女三の宮の和歌の解釈をめぐっては未だ判然としない部分が多く残るが、いずれにせよ言葉少ない彼女の心中がここで吐露されていること、強い意志を持って表明されていることを重く捉えるべきではないだろうか。吉野瑞恵氏も、「若菜上下」巻では「彼女の肉声はおろか、彼女の心をうかがわせる心内語すらほとんど与えられてはいない」としながらも、ここでの女三の宮の和歌には「空虚であるはずの彼女の心に存在することばを伝え、かつ表現の面でも稚拙とはいえず、地の文で語られている「ことばを奪われた」女三の宮像とは落差がある」と述べている。彼女の心の内にのみ存在し、これまで明かされることのなかった言葉が、柏木との「とぢめ」を前に、「立ちそひて消えやしまし」という願望をもって吐露されていることは、物語のなかでも重い意味を持つだろう。次に、明石入道が明石の君に託した「とぢめ」の手紙はどうだろうか。

思ひ離るる世のとぢめに、文書きて、御方に奉れたまへり。

この年ごろは、同じ世の中のうちにめぐらひはべりつれど、何かは、かくながら身をかへたるやうに思うたまへなしつつ、させることなきかぎりは聞こえうけたまはらず。〔中略〕わがおもと生まれたまはむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。〔中略〕この浦に年ごろはべりしほど、わが君を頼むことに思ひきこえはべしかばなむ、心ひとつに多くの願を立てはべし。〔中略〕若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、はたし申したまへ。〔中略〕

命終はらむ月日もさらにな知ろしめしそ。いにしへより人の染めおさける藤衣にも何かやつれたまふ。ただわが身は変化のものと申しなして、老法師のためには功德をつくりたまへ。

〔若菜上〕四―一二―一二五頁

この明石入道の手紙は、「五六枚」〔若菜上〕四―一二四頁〕にも及ぶ長大なもので、物語中でもこれほど内容が詳述されている例

は他にない。手紙のなかでは、明石の君誕生の際にみた夢告や明石の浦での立願の内容、入山を決意するにいたった経緯や、この先の身の処し方にいたるまで詳細に記されている。これまで描かれることのなかった過去、現在、未来にわたる明石一族物語の全貌が、彼の「思ひ離るる世のとぢめ」を前に明かされているのである。また、この手紙の追伸部「命終はらむ月日」以降には、明石入道が自身の葬送を拒否し、明石の君による供養を要求する旨が記されている。²⁰ そうした文脈からみても、明石入道は「思ひ離るる世のとぢめ」を、死後までも射程に入れた、現世における最後の別れと捉えていたことがわかる。²¹ それゆえに、「とぢめ」を意識しながら記された手紙には、物語に底流し明かされることのなかった書き手の心情や生が吐露されるのである。

ただ、本論で問題とする隴月夜にいたっては、自らの死を目前に見据えていたとまではいい難いだろう。²² しかしながら、彼女の出家者としての身が「とぢめ」の根底にあるのだとすれば、これは恋人として光源氏に送る、現世での最後の手紙といえるのではないだろうか。つまり、隴月夜から光源氏への「とぢめ」の手紙は、物語のなかで長く沈黙を続けてきた彼女の心情や生を象るものとして位置づけられ、隴月夜はこれをもって現世での二人の関係に終止符を打ち退場していくのである。

二、「濃き青鈍の紙」と信心

では、隴月夜の手紙には、どのような彼女の心情や生が表出しているのだろうか。本論の冒頭でも確認したとおり、隴月夜の手紙の内容については、光源氏の心に寄り添うものであったか否か解釈に違いが生じている。しかしながら、それらの先行研究は、主に手紙の文面のみを考察し、料紙や折枝が意味するものについては言及していない。伊原昭氏は、料紙と折枝の配色について、「消息の料紙の色は、その内容、あるいはまた、その場の雰囲気・情況、贈答の人物のあり方にまで関連をもち、何らかの形で物語などのテーマに関与するに至る場合も生ずる。さらにそれにつれて、用紙の色は文付枝の色彩をも規定する場合がおこると共に、文付枝の方もまた物語のストーリーに適合するものでなくてはならなくなる²³」と指摘する。このように、手紙の送り主の心情は、文面だけでなく、記された料紙の種類や色彩、添えられた折枝にまで表れ、それらは互いに連関しながら一通の手紙を形成しているのである。したがって、こ

の手紙に表出する朧月夜の心情を読み解くためには、彼女が用いた「濃き青鈍の紙にて、櫛にさしたまへる」という形式が意味するものについても考察する必要があるだろう。本節では、まず「濃き青鈍の紙」について考えてみたい。

朧月夜が用いた「濃き青鈍の紙」について、新編日本古典文学全集頭注は「出家の身にふさわしい色紙²⁴」と注を付し、これは出家者が用いるのに相応しい常套の形式であると解されてきた。青鈍とは、青色に椽や矢車などの墨系の色となる染料を掛け合わせて鉄分で媒染したもので、薄く墨色がかった青色をさす。²⁵『源氏物語』中では、一五例確認でき、うち四例が紙の色を指している。順に確認してみると、葵の上の死に際した六条御息所の手紙（「葵」二一五一頁）、式部卿宮の喪に服する朝顔姫君の手紙（「朝顔」二四七七頁）、明石尼君の精進料理を敷く紙（「若菜下」四一七五頁）、当該場面における朧月夜の手紙（「若菜下」四二二六三頁）の四例である。また、『源氏物語』と同時代の文学作品では、『浜松中納言物語』尼君の喪に服する尼姫君の手紙（三二七頁）、『夜の寢覚』朱雀院の喪に服する帝の手紙（五三六頁）の二例に、青鈍の紙が確認できる。従来指摘されてきたとおり、たしかに青鈍の紙は、仏事に関する場に相応しいものであることがわかった。

それでは、当該場面における朧月夜の手紙の料紙が「濃き青鈍」と、青鈍のなかでも濃いものが用いられていたことは何を意味するのだろうか。右に示した用例のうち、「濃き青鈍」と表現されているのは、当該場面の他に六条御息所の手紙のみである。ここでは、葵の上を喪った光源氏のもとに、六条御息所の弔問の手紙が届けられる。

明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし置きて往にけり。いまめかしうも、とて見たまへば、御息所の御手なり。「聞こえぬほどは思し知るらむや。

人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ
ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。
〔葵〕二一五一頁

光源氏のもとに届いた六条御息所の手紙は、「濃き青鈍の紙」に書かれ、「菊のけしきばめる枝」につけられていた。対する光源氏は、「紫の鈍める紙」（「葵」二一五二頁）で返事をしている。紫の紙は物語中五例確認でき、藤壺と式部卿宮の死を追悼する手紙（「少女」三一七頁）、大君の経の紙（「椎本」五二二八頁）と、先の光源氏の返事を含めた三例が仏事に際して使用されている。よって、青

鈍と紫の紙は死者への追悼の場に適したものと見える。特に、六条御息所と光源氏が用いた料紙は、「濃き」青鈍と「鈍める」紫であり、それは亡き葵の上を悼む気持ちにより強いものであったことを指し示している。

一方で、六条御息所の「濃き青鈍の紙」については、『河海抄』が「いまたひらけされはあをにひの紙に付也葉の色也²⁶」と指摘する。菊の折枝には、花卉の色に合わせた白や紫の料紙を用いるのが通例だが、ここでは開花前の「けしきばめる」状態であったため、葉の緑に合わせた「濃き青鈍」が選ばれている。つまり、ここでの「濃き青鈍の紙」は、死者への追悼の思いを前面に押し出しながら、「菊のけしきばめる枝」が持つ意にも関わっていたのである²⁷。思えば、本論で問題とする場面においても、朧月夜が用いた「濃き青鈍の紙」は花卉のない櫛の折枝につけられていた。とするならば、この朧月夜の「濃き青鈍の紙」もまた、深い信心を持って出家を果したわが身を強調する一方で、櫛の折枝が持つ意味にも関わっているといえるのではないだろうか。次節では、櫛の折枝が持つ意味について考察していく。

三、仏教的芳香を放つ「櫛」

では、櫛とはどのような植物なのだろうか。櫛はモクレン科の常緑小高木で、平安時代以降は主に墓地に植えられ、仏事の際に用いられていた²⁸。また、一〇世紀に成立した『妙法蓮華経釈文』では「櫛〈巳〉一反。慈恩云香木也。切韻作櫛。其樹似槐而香極大〔後略〕」と注され、極めて強い香りを放っていたことが窺える。

平安時代の文学作品における櫛の描写は、『源氏物語』に二例、『枕草子』に一例、『栄花物語』に一例、『狭衣物語』に一例確認できる。『栄花物語』では、長谷寺へ参詣する詮子に供した女童の名に「しきみ」（みはてぬ夢）——一九六）がみえる。それに対して他の用例では、すべて櫛の放つ香りに焦点が当てられる。

『枕草子』一一六段では、清水寺本堂の内陣を目にした作者が「なごて月ごろ詣でで過ぐしつらむ」と、まづ心もおこる」（二二二頁）と自身の信心を内省している。作者の信心を掻き立てた内陣の様子は、以下のように描写されている。

御みあかしの、常灯にはあらで、うちにまた人の奉れるが、おそろしきまで燃えたるに、仏のきらきらと見えたまへるは、いみじうたふときに、手ごとに文どもをささげて、礼盤にかひろぎちかふも、さばかりゆすり満ちたれば、とりはなちて聞きわくべきにもあらぬに、せめてしほり出でたる声々、さすがにまたまぎれずなむ。「千灯の御こころざしはなにがしの御ため」などは、はつかに聞ゆ。帶うちして拝みたてまつるに、「ここにつかう候ふ」とて、櫛の枝を折りて持て来たるは、香などのいとたふときもをかし。

(第一二六段「正月に寺に籠りたるは」二二三頁)

まず作者の目に飛び込んできたのは、仏前に供えられた灯明が恐ろしいまでに燃え盛る様子と、炎に照らされて「きらきら」と照り輝く本尊十一面観世音菩薩である。仏前を覆い尽くす一千の祈りの灯明と本尊の姿は、作者の心に「いみじうたふとき」ものとして深く刻まれていく。また、作者のもとに僧が近寄ってきた際には、彼が持つ「櫛の枝」から漂う「いとたふとき」香りに関心が向けられる。渡辺仁史氏は、平安時代の文学作品のなかで『枕草子』には仏教的芳香に関する描写が少ないとし、ここでの「櫛」の「香」の清新さは清少納言の心に染み入る「尊き」宗教的契機として記された³⁰と述べている。このように、櫛の枝から漂う香りは、人々の祈りによって光り輝く本尊の姿とともに、作者の信心を掻き立てていくのである。また、『源氏物語』でも信心と深く関わる櫛の香りが描かれている。次に掲げるのは、八の宮の一周忌のために宇治を訪れた薫が、大君と対面する場面である。

今宵はとまりたまひて、物語などのどやかに聞こえまほしくて、やすらひ暮らしたまひつ。あざやかならず、もの恨みがちなる御気色やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしくて、うちとけて聞こえたまはむこともいよいよ苦しけれど、おほかたにはありがたくあはれなる人の御心なれば、こよなくもてなしがたくて対面したまふ。仏のおはする中の戸を開けて、御灯明の灯けざやかにかかけさせて、簾に屏風をそへておはする。

(「総角」五―三三三頁)

この場面で注目すべきは、大君が薫との対面に際して「仏のおはする中の戸を開け」たことである。大君は仏間の灯明を薫の方まで「けざやかにかけさせ」、仏との境界を取り払うことで色めいた彼の心を抑制しようと試みている³¹。先に確認した『枕草子』における内陣の様子と同様、ここでも薫の前には灯明に照らし出された仏の姿が見えていたことだろう。だが、薫は人が寝静まったのを見計らって大君のもとに押し入り、仏像を几帳で隔て、添い臥すのである。

御かたはらなる短き几帳を、私の御方にさし隔てて、かりそめに添ひ臥したまへり。名香のいとかうばしく匂ひて、櫛のいとほなやかに薫れるけはひも、人よりはけに仏をも思ひきこえたまへる御心にてわづらはしく、墨染のいまさらには、をりふし心焦られしたるやうにあはあはしく、思ひそめしに違ふべければ、かかる忌なからむほどに、この御心にも、さりともすこしたわみたまひなむなど、せめてのどかに思ひなしたまふ。

〔総角〕五―三三六頁

仏の姿は隠されたものの、二人のもとには几帳を越えて名香や櫛の香りが漂ってくる。これらの仏教的芳香は、「人よりはけに仏をも思ひきこえたまへる」薫に信心を思い起こさせ、彼の心を静めていく。『狭衣物語』でも、狭衣は櫛の抹香で焚きしめられた女二の宮の衣に、かつての彼女の姿を思い出す一方で、未だに出家を果たせぬ身への悔恨の情を覚えている（巻四、二―二二二―二三三頁）。このように、この世とあの世を繋ぐ櫛の仏教的芳香は、ときに信心を掻き立て、またあるときは信心のあり方を振り返らせるものとして機能する³³。ただ、これまで確認してきた例は、あくまで偶発的に起こった出来事に過ぎない。それに対して当該場面の朧月夜は、自ら光源氏に櫛の折枝を送っているのである。したがって、朧月夜の「濃き青鈍の紙にて、櫛にさしたまへる」手紙の形式には、深い信心を持って出家を果たしたわが身が象徴的に示されるとともに、光源氏の信心のあり方を問うものとしての意味が見て取れるのである。

四、「あま舟」に乗る朧月夜と「思ひおくれ」た光源氏

では、朧月夜の手紙の文面には、どのような心情が吐露されているのだろうか。本節では、和歌表現の分析をとおして朧月夜の心情を検討し、その上で彼女の最後の姿が光源氏にどのような影響を与えていくのかを考えたい。

当該場面における光源氏と朧月夜との贈答歌については、はやく『一葉抄』に指摘がある。まず、光源氏の贈歌「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩たれしも誰ならなくに」から確認していこう。

あまの世八世をそむくよし也よそにきかめやと八源氏の御道心を望ある也もしほたれしもと八あまの世を海辺によせて我こそあま

の世をもしるへき身なれと也世をそむくへき身ハ我そといふ心也かくいふうちに臚ゆへにしつミしいにしへの事こもるへし³⁴

この注によれば、光源氏が「あまの世をよそに」聞くことができないのは、彼もまた道心への望みを持っていたからであるという。すると、「あま」に「海人」と「尼」を掛けて、須磨という「海人の世」で悲嘆に暮れたわが身こそ「尼の世」を知るべきであったと述べていることになる。また、ここに「臚ゆへにしつミしいにしへの事」も込めるとするならば、須磨での沈淪は臚月夜との関係ゆえであったのだから、彼女の「あまの世」もまた、他人事ではないのだと詠まれているといえるだろう。一方、臚月夜の答歌「あま舟にいかかは思ひおくれけむ明石の浦にいさりせし君」については、どうだろうか。

是もあま舟を海辺によせたり心は道心をくれ給しを云也あかしのうらにいさりせしとハ明石上の事をふくみたりいさは廻嶋と書り海辺にさすらへし事也³⁵

右の『一葉抄』をはじめとした諸注釈書は、臚月夜の「あま舟」にも、光源氏と同様「海人」と「尼」が掛けられていると指摘する。とすると、この和歌は明石の浦で「海人舟」に乗っていたはずのあなたが、なぜ「尼舟」に乗り後れたのかという意味になる。右の『一葉抄』で指摘されるとおり、この臚月夜の和歌の主眼は「道心をくれ給しを云」ところにあり、そこに彼女の心情が表れているのである。では、「あま舟にいかかは思ひ後れけむ」について深くみていこう。

「あま舟」とは漁夫の乗る舟を指し、歌語としては『萬葉集』の三例が初出である。このうち二例は、鮪を釣る海人舟（巻第六、九四三／九三八番歌）、布勢の海で漁をする海人舟（巻第一七、四〇一七／三九九三番歌）が詠まれており、この舟の性質などは窺い知ることができない。もう一例は、以下のとおりである。

2756 庭淨 ニハキヨミ 奥方榜出 オキヘコギイツル 海舟乃 アマフネノ 執梶間無 カヂトルマオキ 恋為鴨 コヒモスルカモ
2746 庭淨 ニハキヨミ 奥方榜出 オキヘコギイツル 海舟乃 アマフネノ 執梶間無 カヂトルマオキ 恋為鴨 コヒモスルカモ（『萬葉集』巻第一一、寄「物陳」思）

この和歌には、「奥方榜出」「執梶間無」と、漁夫の乗る海人舟の性質がよく表れている。休みなく梶を動かして奥へ奥へと漕ぎ出していく海人舟の様子に、先の知れない恋に深入りし、絶え間なく相手を慕う詠者の姿が重ねられている。また、平安時代以後は、本論で問題としている光源氏と臚月夜の贈答歌のように、「海人舟」に「尼舟」を掛けて、尼が乗る舟を詠むようになる。

つなでひくふねを見て

よどみなくなみぢにかよふ あま舟 はいどこをやどとさしてゆくらむ (『惠慶法師集』)

観身岸額離根草、論命江頭不繫舟

294 ろもおさで風にまかする あま舟 のいづれのかたによらんとすらん (『和泉式部集』)

『惠慶法師集』の和歌は、綱手という他の力によって淀みなく進む漁夫の海人舟に対して、尼の乗る尼舟は一体どこへ進んでいくのだろうか、行方を案じる心境を詠んでいる。次に、『和泉式部集』では「観身岸額離根草、論命江頭不繫舟」と題された連作のなかに「あま舟」という歌語が確認でき、ここでは、人間の身の上や生命が儂く頼りないものであることを題として、二六八から三一〇番歌にわたって、恋人の死への嘆きや自らの死や罪、出家への感慨を詠んでいる。右に掲げた二九四番歌では、舟を漕ぐための櫓も押さずに「あま舟」のように漂う自身の行先への不安が吐露されている。この和歌の海人舟に、尼舟が掛けられているかについては判然としない部分も残るが、頼みにしていた人を失い、無気力に漂う詠者の様子を思えば、そこに出家への思いが含まれていても不自然ではないだろう。このように、和歌集における「あま舟」には、基本的に漁夫の乗る「海人舟」が詠まれ、平安時代以後では、そこに尼の乗る「尼舟」を掛け、尼という身がいかに不安定なものであるか、舟そのものが持つ性質に重ねて表現されているのである。

では、『源氏物語』における「あま舟」はどうだろうか。『源氏物語』では、朧月夜の和歌のほかに二例確認でき、それらもすべて和歌表現として用いられている。以下に掲げるのは、明石尼君と明石の君が出立を前に交わした贈答歌である。

ここら年を経ていまさらに帰るも、なほ思ひ尽きせず、尼君は泣きたまふ。

かの岸に心寄りにし あま舟 のそむきしかたにこぎかへるかな

御方、

いくかへりゆきかふ秋をすぐしつづき木にのりてわれかへるらん

(「松風」二一四〇六―四〇七頁)

明石尼君の和歌では、彼岸に心を寄せ仏道修行に励んできた自身を「かの岸に心寄りにしあま舟」と表現している。だが、下句では反対に「そむきしかたにこぎかへるかな」と、俗世へと漕ぎ帰らねばならない舟が詠まれている。ここには、仏道修行を積み、彼岸へと近づいたにもかかわらず、また俗世へと引き返さねばならないという、行く先の定まらない不安定な身が吐露されている。一方、明

石の君は「あま舟」にすら乗れない私は「うき木」に乗って都へ戻ると表現し、俗世に生きる身の拙さを詠んでいる。また、次の場面では中将が浮舟を「あま舟」に喩えている。

「聞こえん方なきは、

岸とほく漕ぎはなるらむ あま舟 にのりおくれじといそがるかな」

例ならず取りて見たまふ。もののあはれなるをりに、今は、と思ふもあはれなるものから、いかが思さるらん、いとほかなきもの端に、

心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのうき木を

と、例の、手習にしたまへるを包みて奉る。

〔手習〕六一三四二頁

右では、中将が出家を果たした浮舟を「岸とほく漕ぎはなるらむあま舟」と表現する。彼岸へと漕ぎ離れて行った「あま舟」に「のりおくれじ」という詠み方からは、すでに出家を果たした浮舟との間に存在する懸隔を彼自身が強く意識していたことが読み取れる。対する浮舟の返歌では、心は彼岸へと向かい進み出たが、実際には「行く方も知らぬあまのうき木」のように頼りないものであったと詠まれている。このように、『源氏物語』における「あま舟」という歌語は、出家を遂げた者とそうでない者との心の懸隔を浮かび上がらせるものとなる。「あま舟」は、乗ることすらできない者にとつては、やがては彼岸へと辿り着く頼もしい舟と捉えられるが、そこに乗る当人してみれば、行方も知れぬ不安定なものなのである。ならば、当該場面における朧月夜の「あま舟」という歌語にも、これまで確認してきたような、尼としての不安定な身が重ねられていたと考えられるのではないだろうか。

遡れば、朧月夜は右大臣の死、弘徽殿太后の病、朱雀帝の退位をとおして、すでに不安定な身の上を自覚しており、そこでは「心細げに世を思ひ嘆」〔濔標〕二二二八〇頁く彼女の姿が描かれている。自身を取り巻く環境が移り変わっていくなかで、頼みになるはずの光源氏の情愛さえ、「さしも思ひたまへらざりし」〔濔標〕二二二八一頁)ものであったと思ひ知り、「わが心のいはけなきにまかせて、さる騒ぎ」〔濔標〕二二二八一頁)を引き起こした身を悔やむのであった。朧月夜が密通の罪に一人で向き合い続けてきたことは、当該場面の手紙に記された「常なき世とは身ひとつにのみ知りはべりにし」、「明石の浦にいさりせし君」といった文言からも読み

取ることができ、出家を遂げてもなお、そうした孤立感を抱えていることが窺えるだろう。このように、朧月夜の和歌には、光源氏との過失を「身ひとつにのみ」引き受け、贖罪として「あま舟」に乗り込むも、未だ救われぬ思いを抱えて苦悩する彼女の姿が表出している。「あま舟にいかかは思ひおくれけむ」という彼女の上句は、救いを得られず彷徨する身への理解を訴えかけるものとして、哀切な響きを持つのであった。

だが、一方の光源氏は、朧月夜の手紙を目にしたあと、紫の上に「いといたくこそ辱められたれ。げに心づきなしや。さまざま心細き世の中のありさまを、よく見過ぐしつるやうなるよ」（「若菜下」四―二六三頁）と語っている。こうした発言からは、先に見られたような出家を遂げた者とそうでない者との心の懸隔が見て取れる。朧月夜にとっては不安定に漂う「あま舟」であっても、出家を遂げ得ぬ光源氏にしてみれば、そこに「思ひおくれ」たとされることが侮辱を与えられたこととして捉えられているのである。また、のちに女三の宮に対しても「たどり薄かるべき女方にだにみな思ひ後れつつ、いとぬるきこと多かる」（「若菜下」四―二六九頁）と、朧月夜や朝顔姫君などの、先に出家を果たした女君らを引き合いに、「思ひ後れ」た身や、道心の温さを語っている。物語のなかで、「思ひおくる」という語は、この光源氏の発言の他には朧月夜の和歌「あま舟にいかかは思ひおくれけむ」にしか見られない。つまり、出家を果たせぬ光源氏にしてみれば「あま舟」に乗る朧月夜の姿は、自身との懸隔をより強く意識させるだけでなく、時間を経ることに「思ひおくれ」たわが身を象徴し、俗世で生きる身を決定づけるものとして深く心に刻まれていくのであった。

おわりに

以上、本論では「若菜下」巻における朧月夜の手紙について、手紙の形式や文面に記された和歌表現を分析することで、そこに表出する彼女の最後の姿がいかなるものであったのか、またそれが光源氏との物語のなかでどのような意味を持つのかを検証してきた。

出家を果たした朧月夜は、この手紙を光源氏との「とちめ」と捉えている。「とちめ」とは現世における別れを意味し、こうした意識のもと記された手紙には、これまで明かされることのなかった書き手の心情や生が吐露されるのである。当該場面の朧月夜の「とち

め」の手紙においても、物語のなかで長く沈黙を続けてきた彼女の、語られることのなかった心情や生が表出しているといえよう。手紙の形式では、とりわけ色彩の濃い「濃き青鈍の紙」や、仏教的芳香を放つとされる「檜」の折枝を用いることで、深い信心のもと出家を選び取った身が象徴的に示されていた。その一方で、文面に記された「あま舟にいかがは思ひおくれけむ」という言葉からは、出家を果たしてもなお救われぬ思いを抱えて、苦悩し彷徨する朧月夜の姿が立ち現れている。この手紙の形式や文面からは、彼女を出家へと駆り立てた深い信心の根底に、光源氏との過去の密通による罪の意識があったこと、贖罪として出家を果たすも救済されることのない思いを現在も抱え続けていることが窺える。だが、そうした出家者としての朧月夜の苦悩は、出家を果たせぬ光源氏にとっては「思ひおくれ」た身を決定づけ、二人の懸隔をより意識させるものでしかない。

朧月夜の最後の手紙は、これまで明かされることのなかった彼女の孤独な半生を象るものとして、過去から現在にいたるまで「身ひとつにのみ」苦しみ続ける彼女の姿を映し出す。光源氏との物語の終焉において、そうした朧月夜の最後の姿は、贖罪としての出家が必ずしも自己の救済にはなり得ないことを意味しているのであり、それは同時に、第二部世界という過酷な現実を生きていく光源氏の生にも重くのしかかるものとなるだろう。こうして、最後まで救いを得られぬ朧月夜は、行方も知れぬ「あま舟」に乗って、物語を一人退場していくのであった。

注

1 古典文学作品の本文・頁数は、原則として新編日本古典文学全集（小学館）に拠り、『うつほ物語』本文は室城秀之『うつほ物語全改訂版』（おうふう、一九九五年）、和歌は『新編国歌大観』（角川書店）から引用し、その他については適宜示す。傍線等は適宜補っている。

2 森一郎「女三の宮降嫁の事件」（『源氏物語の方法』桜楓社、一九六九年、一六〇頁）。また、秋山虔氏は、光源氏と朧月夜の再会がのちに発展しないことから、ここでの光源氏は「ただ回顧し、詠嘆することによって別世界にいきづいている」と解している（『若菜』巻の一問題―源氏物語の方法に関する断章―『日本文学』九一七、一九六〇年七月、一四頁）。

- 3 石津はるみ「若菜への出発―源氏物語の転換点―」（『国語と国文学』五二―一、一九七四年一月、五三頁）。
- 4 鈴木日出男「源氏物語の和歌」（源氏物語探究会編『源氏物語の探究』五、風間書房、一九八〇年、三八五頁）。
- 5 前掲注4に同、三八七―三八八頁。
- 6 秋賢淑「朧月夜の君の再登場をめぐって」（『論輯』二八、二〇〇〇年五月、二九頁）。また、武原弘氏は、朧月夜が光源氏との再会前から仏事に励んでいたことを挙げて「朧月夜は、すでにはやく源氏との恋を清算し、はるかな求道の旅路へと出発していた」（『朧月夜像の再把握』『源氏物語の認識と求道』おうふう、一九九九年、八三頁）とし、平林優子氏も「物語は、朧月夜の苦悩を真正面から描かないが、源氏との再会の時点において、朧月夜が、これから紫の上の入って行くとして行こうとしている道のはるか先を進んでいることだけは確実である」（『若菜巻の朧月夜と光源氏』『東京女子大学紀要論集』六二―一、二〇一一年九月、五八―五九頁）と指摘する。こうした指摘を踏まえれば、「若菜上」巻での再会の時点ですでに、朧月夜の心は光源氏から離れていたといえる。
- 7 姥澤隆司「光源氏の寂寥―周辺女性達との出家をめぐる対話の意味するもの―」（『北海道文教大学論集』一一、二〇一〇年三月、一五九頁）。
- 8 中田武司編『源氏物語古注集成』一―三『岷江入楚』三（桜楓社、一九八二年、五五五頁）。
- 9 なお、新編日本古典文学全集『うつほ物語』（『菊の宴』二―四二頁）は、諸本で欠けている源仲頼詠の和歌を九大本（九州大学図書館蔵延宝版本書入れ三〇冊）によって補入し、そこに動詞「とぢむ」が一例確認できる。
- 10 他作品における「とぢめ」関連語の用例数は以下のとおりである。『紫式部日記』一例、『浜松中納言物語』三例、『夜の寝覚』八例、『狭衣物語』四例、『花物語』一例、『とりかへばや物語』三例。
- 11 この他に、浮舟の葬儀「とぢめのこと」（『蜻蛉』六一―二一五頁）なども含めると、全体の半数近くが死を表すことになる。
- 12 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年、五〇五頁）。また、文明六（二四七四）年頃に成立し、熟語に読み仮名を付した『文明本節用集』でも「閉目トヂメ」と記されている（中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引改訂新版』『影印篇』勉誠社、二〇〇六年、三七―三八頁）。
- 13 東京大学史料編纂所編『大日本古記録』『小右記』八（岩波書店、一九七六年、一六一頁）。
- 14 直接的な死の表現と関わない例としては、動作の完結を意味するもの（『賢木』二―一四二頁、「夕霧」四―四八七頁、「御法」四―四九八頁）、時世や

- 季節の変化を意味するもの（『賢木』二一九八頁、「若菜下」四一―一五四頁）などがある。
- 15 「末摘花」巻では、物言わぬ末摘花を見かねた侍従が「鐘つきとぢめむことはさすがにてこたへまうきぞかつはあやなき」（二―二八三頁）と彼女に代わり光源氏に歌を詠みかける。この和歌は、終了を知らせる鐘をつくかのように、光源氏との仲を自ら「とぢめ」ることはできないと詠んでおり、ここでも「とぢめ」が女性側から関係を解消する意で用いられていることがわかる。
- 16 新編日本古典文学全集『源氏物語』「柏木」四―二九七頁、頭注四。
- 17 佐竹彌生「女三宮と柏木の贈答歌について―おくるべうやは―」（『平安文学研究』六四、一九八〇年二月、一三〇頁）。また、吉見健夫氏も、女三の宮の和歌表現が「相手との一体感や親密感を強く志向するもの」であったと述べている（『柏木物語の「あはれ」と救済―『源氏物語』作中和歌における認識の形成―』（『中古文学』七一、二〇〇三年五月、二八―二九頁）。
- 18 吉野瑞恵「女三の宮の「煙くらべ」の歌が意味するもの―解釈の揺れをめぐって―」（『源氏物語煌めくことばの世界Ⅱ』翰林書房、二〇一八年、三二―三三頁）。
- 19 前掲注18に同、三二―三三頁。
- 20 明石の入道の遺書については、竹内正彦「変化」の明石君―「若菜上」巻における明石入道の最後の遺言―」（『源氏物語発生史論―明石一族物語の地平―』新典社、二〇〇七年）に詳細な論がある。
- 21 拙稿では、この明石入道の手紙が「陸奥国紙にて、年経にければ黄ばみ厚肥えたる五六枚」（『若菜上』四―二四頁）に記される点に注目し、そこからも死への意識が読み取れることを論じた（『『源氏物語』六条御息所の最後の手紙―「白き唐の紙四五枚」と〈連作〉が示すもの―』（『國學院雑誌』一一八―一九、二〇一七年九月、一一二頁）。
- 22 その一方で、李愛淑氏は「若菜上」巻での朧月夜と光源氏との再会の場で「いまたび」という表現が多用されることについて、「再会の場の「いまたび」は〈最後〉のイメージを物語に呼び寄せてくる」（『物越し』の男女―光源氏と朧月夜の再会の場を考える）鈴木日出男編『ことばが拓く古代文学史』笠間書院、一九九九年、五三〇頁）と指摘する。
- 23 伊原昭「物語における色紙と文付枝の配色―特に源氏物語について―」（『文学・語学』（季刊）三七、一九六五年九月、五九頁）。また、料紙の色が手紙

において重要な要素であったことは、田中仁「色々の紙の手紙―『源氏物語』における―」（『親和國文』二二二、一九八七年二月、三八頁）にも指摘される場所である。

24 新編日本古典文学全集『源氏物語』「若菜下」四―二六三頁、頭注一六。

25 吉岡幸雄『日本の色辞典』（紫紅社、二〇〇〇年、一四四頁）。

26 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年、二九〇頁）。

27 拙稿では、ここでの六条御息所について、「濃き青鈍の紙」で吊問に相応しい手紙の形式を保ちながら、そこに「菊のけしきばめる枝」を合わせることで、光源氏への変わらない心や今後の関係性への期待感を示していたと論じた（『源氏物語』六条御息所と吊問の手紙―「葵」巻「思ひやる」を端緒として―」（『國學院大學大学院文学研究科論集』四八、二〇二二年三月、一二頁）。

28 「櫛」については、稲城信子「しきみの民俗」（『月刊文化財』一五〇、一九七六年三月）、田中文雄「〈櫛〉考―密教における櫛とシキミ―」（『豊山学報』五八、二〇一五年三月）に詳細な論がある。

29 高楠順次郎編「妙法蓮華経釈文卷上」『大正新脩大藏経』（五六統経疏部二、大正新脩大藏経刊行会、一九九一年、一五三頁）。なお、〈〉は割注として補っている。

30 渡辺仁史『枕草子』の香りと信仰―櫛の香の尊き―」（『一関工業高等学校研究紀要』五一、二〇一六年二月、二六頁）。

31 新編日本古典文学全集頭注も、「これを開け放して仏の像を見えるようにするのは、薫の言動を牽制するためであろう」と注している（『総角』五一―二二二頁、頭注三）。

32 黄建香氏は、ここでの「名香」と「櫛」の香りを「この世とあの世に跨る唯一の橋」（『源氏物語』におけるあの世の匂い―薫と大君との交際をめぐって―）『昭和女子大学大学院日本文学紀要』一五、二〇〇四年三月、七頁）と述べる。

33 三田村雅子氏は、ここでの「名香」について、「宇治十帖では、薫の芳香と混じり合うこともなく、かえってこれに反撥して、「恋のあはれ」にひたろうとする主人公を引き戻し、覚醒させる機能を持っているのである。それらのきつい匂いによって、薫は八の宮の存在を想起し、その立場から一周忌もすまないうちに大君に迫ろうとする自己を省みる」（『方法としての〈香〉―移り香の宇治十帖へ―）『源氏物語 感覚の論理』有精堂、一九九六年、二〇七

頁)と述べる。

- 34 井爪康之編『源氏物語古注集成九』『二葉抄』(桜楓社、一九八四年、三二五頁)。
35 前掲注34に同。